

日本ユーラシア協会東京都連再建総会記念講演

中村喜和先生（一橋大学名誉教授）

## 秋田県のウラーのことなど --日露のさまざまなつながり（レジュメ）

最近私は秋田県のある旧家に伝わる古文書を目にする機会があった。その古文書には、和紙に墨書きでさまざまな記録が書かれていたが、その中に、アメリカのペリー提督やロシアのプチャーチン提督の来航の記事とならんで、ロシアの海軍士官フグオストフのサハリン襲撃の史実が 10 行ほどの記事になって含まれていた。

秋田県の旧家というのは、現在では大仙市という市に属しているが、わりと最近までは村だったところである。旧家はその村の庄屋を代々つとめていた。庄屋が所蔵する文書になぜ外国の使節などの記録が書き込まれていたか、その理由は明白である。外国との交渉やもめ事の起こるたびに、国家としての日本の財政上の負担が増大する。その結果一つ一つの農村、ひいては農民の上に経済的な費用や賦役が重くのしかかってきたのである。国家の大事は農民の大事、外国軍艦の渡来は村の指導者として他人事ではなかったのだ。

その村の出身の歴史家から私は面白い話を聞いた。村の祭のときそこでは「ウラー」という歓声をあげる習慣があったというのである。それは昭和の 10 年前後のことだった。その原因は秋田県の近代史を読んで推察がついた。目下ベストセラーになっている小林多喜二の「蟹工船」もその傍証になるが、大正の末期から秋田県では農閑期に出稼ぎに出る人たちが大勢いた。蟹工船に乗っていた漁夫には秋田や青森や岩手の農民たちが多かった、と多喜二が書いている。船だけではなく、カムチャツカやサハリン（当時、南半分は日本領）などの沿岸に缶詰工場が建てられ、そこでも大勢の日本人がはたらいていた。昭和 9 年、ソビエトの極東地方に約 1 万人の日本人が季節労働に従事したという数字がある。そのうち、4 割あまりが秋田人だったらしい。1 年のうち数カ月カムチャツカなどで過ごした青年たちは当然ロシアの風習に馴染んでいて、お祭などのときにウラーという歓声を発して氣勢をあげたものであろう。

上記のフグオストフが来襲したときには、エトロフ島で不意をついて日本側の守備隊を打ち破ったあとで、ロシア兵たちが一斉に「ヲラ、ヲラ」という勝ちどきをあげたと記録にある（箱館奉行の羽太正養<sup>はぶとまさやす</sup>の書いた「休明光記」）。私の考えでは、これを現代風に表記すれば「ウラー、ウラー」のいう掛け声だったにちがいない。

フグオストフらがサハリンやクリル諸島に攻撃をしかけたのにはわけがあった。1804 年に交易を求めて長崎へ来航したロシア使節のレザーノフが、入港許可証を持参したにもかかわらず、半年も待たされたあげく素気なく退去させられた。レザーノフは部下のフグオストフに命じて日本の北辺を荒らしたのだった。1806～1807 年のことである。幕府はあわてて東北の諸藩に出兵を求め、防備を固めた。数千人の武士が動員されたことがわかっている。

1811 年にロシアの軍艦ディアナ号が測量にやってきて、艦長ゴロヴニンらが捕虜になった。彼らは松前で牢に入れられた。副艦長のリコルドは持舟に乗っていた豪商の高田屋寡兵衛を揺らえ、嘉兵衛の助言で日本側に詫言を入れてゴロヴニンらを救い出すことに成功した。嘉兵衛の沈着で誠実な人柄はロシア人を大いに心服させた。

リコルドやゴロヴニンが帰国後に書いた手記によると、1913 年にディアナ号が箱館を出帆するとき、乗組員たち甲板に整列して「タイショウ、ウラー」七三喝した。寡兵衛は常々部下からタイショウと呼ばれていたらしい。これに対して、嘉兵衛も「ディアナ、ウラー」と叫びかえしたという。日本で最初にウラーと唱えた人物は高田屋嘉兵衛だったかもしれない。

## <秋田県のウラーノ関連年表>

- 1579 エルマークの率いるカザーク部隊シベリアへ進出開始
- 1639 日本人出国禁止令（いわゆる鎖国）。このころ、ロシア人がオホーツクに達する
- 1702 大坂の商人デンベイ、ピョートル一世に謁見
- 1734 薩摩のソウザとゴンザ、ペテルブルグに到着、2年後に日本語学校が開かれる
- 1739 奥州や安房の沖にロシア船出沒して漁民と接触（元文の黒船）
- 1745 下北半島佐井の多賀丸、クリル諸島に漂流
- 1754 日本語学校、イルクーツクに移される
- 1771 ペニヨフスキ、ロシアの南進を警告して去る
- 1779 蝦夷地の厚岸で松前藩士、ロシア商人と接触
- 1782 年の暮、光太夫の神昌丸、白子港を出帆
- 1783 工藤兵助「赤蝦夷風説考」を著わす
- 1785 幕府、蝦夷地に探検隊を派遣、実情調査（-86）
- 1886 林子平「海国兵談」の執筆開始
- 1791 光太夫、エカテリナ2世に謁見、帰国を許される
- 1792 漂流民、大黒屋光太夫らラクスマンとともに根室にロシアから帰国
- 1793 アダム・ラクスマン、壺府の役人と松前で会談。揺藤（長崎入港許可書）を得て帰国  
「北楼聞略」などが編集される
- 1799 幕府、東蝦夷地を仮直轄地とする。イルクーツクの商人らによって露米会社が設立
- 1804 ロシア皇帝の使節レザーノフ、長崎に来航。幕府交渉に応ぜず。翌年初め、空しく長崎る。レザーノフとともに若宮丸船員4人帰国（津太夫ら）
- 1806 ロシアの海軍士官フグオストフ、サハリンに来襲（露暦10/10、和暦文化3年9/11）  
翌年の和暦4年3月にこのことが松前、箱館に告げられる。箱館奉行の羽太正養が直ちに幕府に  
飛脚をたてる（「休明光記」による）
- 1807 ロシア士官フヴオストフら、エトロフ島シヤナを襲う（露暦5/24、和暦4/29）  
幕府は全蝦夷地を直轄地とし、東北の諸藩に命じて、北辺の警備を固める
- 1811 ゴロヴニンらクナシリ島で掃えられて松前に監禁される。2年後に釈放
- 1812 高田屋嘉兵衛、ロシア側に掃えられ、問題解決に尽力
- 1853 プチャーチン使節の軍艦、長崎に来航
- 1855 下田で日露通好条約が締結される
- 1875 樺太千島交換条約が締結される。条約には日本人の漁業権に言及があったものの、それについて  
折衝が行なわれた形跡はない
- （1890年代）缶詰を用いる大量生産方式の食品加工の技術が発明され、普及はじまる
- 1894 ロシア側の法令により、サハリンにおける外国人漁業が規制を受ける
- 1895 スコットランド人デンビー、ロシアに帰化して、セメノブ（セミョーノフ）商会の共同経営者となる。
- 1899 函館でセメノブ商会が登録される。サハリンのコンプ、ニシン、サケ、マスを扱う。  
大勢の日本人漁夫を使駄本社はウラジグオストーク、経営の本拠地は函館  
この年、日本人漁業家たちが（ロシア人名義）カムチャトカに出漁し、成果挙げる
- 1906 堤清六、平塚常次郎が堤商会を設立して、カムチャトカに出漁。サケ、マスの缶詰を生産して、  
英国などへ輸出。のち日魯漁業（株）などを合併吸収して社名を日魯漁業（株）と改め、本社を  
東京に置いた
- 1917 ロシア革命。外国資本の進出を規制する方向にうごく。
- 1920年代 カニ工船漁業、タラ、カレイなどの底魚対象とする漁業、母船式サケ、マス漁が開始される。
- 1928 小林多喜二の「蟹工船」が発表される（雑誌『戦旗』）
- 1933 この年の「日露年鑑」によると、ソビエト側の漁業公団（アコ）に雇用された日本人は9545人を  
数えた